

## アルフォンス・ルグロと素朴さ(naïveté)

— 《エクス・ヴォト (祈願画)》をめぐって —

東京大学 安藤 智子

アルフォンス・ルグロは、1850年代半ばからマネやファンタン・ラトゥールらと共に、パリの前衛的な芸術家グループの一人として、油彩画と銅版画により、主に宗教風俗画の制作に励んでいた。そして1863年以降は、経済的な理由からイギリスに活動の場を移す。

本発表では、61年のサロンに入選した《エクス・ヴォト (祈願画)》を中心に、ルグロが創出した「素朴さ(naïveté)」に光を当てる。そして、その「素朴さ」の源泉が民衆版画にあること、さらにクールベの《オルナンの埋葬》と比較しながら、シャンフルーリの芸術理論がルグロ作品に投影されていたことを指摘し、ルグロの「素朴さ」が「現代性」を志向していたことを論じる。

《エクス・ヴォト》では、森の片隅で祈願画に祈りを捧げる村の女たちが描かれている。当時のサロン評によると、モチーフの卑俗さ、醜いと言われる真実味のある表情、加えて造形上の欠陥が「素朴さ」を創出していると受け取られ、これらの「素朴さ」という特質が《オルナンの埋葬》を想起させたことがわかる。そもそも「素朴さ」は民衆芸術に対する形容であった。そして民衆芸術に関心を持ち、地方の農民のための稚拙な版画である民衆版画を美術史的な観点から研究したのが、ルグロと親交の深かったシャンフルーリである。シャンフルーリは『民衆版画の歴史』において、地方固有の「素朴さ」に美的な価値を見出し、これこそが過去の伝統的な絵画様式に追従している同時代の画家に対する処方箋になるべきだと述べている。

《エクス・ヴォト》と《オルナンの埋葬》では、いかに民衆版画を作品に取り込んだかという点で、大きな違いが見られる。《埋葬》は、民衆版画の造形的な特徴を借用していても、描かれた人物と場所が特定化されることで時事的な性格を持ち、さらに人物相互の関係性が希薄で作品の中心となる主題に収束しがたいがために、田舎の埋葬という表象を超えて、政治的なコンテクストへと導かれる。一方《エクス・ヴォト》は、当時広く浸透していた民衆版画の宗教図像と主題、そして造形様式において民衆版画を踏襲している。つまりルグロは、シャンフルーリが言及している地方の民衆版画の「素朴さ」そのものを画面に写し取り、名もない民衆の祈りという普遍的な主題へと帰結させることを意図したのである。

デュランティが指摘しているように、《エクス・ヴォト》は「素朴さ」を媒介とし、描かれた人物の性質と造形様式が一致したことで、「現代生活の感覚」を表出することに成功した。このような作品の内容と形式の一体化のために、ルグロが試みた絵画空間の歪みや形体の単純化といった主観的な絵画表現は、後年の象徴主義の理論に通底している。象徴主義が作品が喚起する精神性を重視したのと同様に、民衆の精神の所在を表象するというルグロの志向に「現代性」があったと考える。